

下、騎馬前駟、内裏中宮鳥羽子、女房、連車追従、男女装束、裁錦繡金銀、於白河南殿被講和歌、内大臣獻

序又見帝王編年記元年閏二月、三代要略一代要記作二年二月、十

〔續世繼二白河の花宴〕保安五年元天治にや侍けむ、さざらぎにうるふ月侍し年、白河の花御らんせ

させ給とてみゆきせさせ給しこそ、世にたぐひなきことには侍りしか、法皇白も、院鳥も、ひ

どの御車にたてまつりて、御隨身にしきぬひもの色々にたちかさねたるに、かんだちめ殿上人、

かりさうどくにさまへにいろをつくして、われもくことばもおよばず、こがの太政のお

とゞ源も御むまにて、それはなをしにかうぶりにてつかふまつり給へり、院の御車のしりに、

待賢門院子、璋ひきつゝきておはします、女房のだしぐるまのうちいで、若ろがねこがねに、若か

へされたり、女院子、璋の御車の若りには、みなくれなむの十ばかりなるいだされて、くれなゐの

うちぎぬ、さくらもえぎのうはぎ、わか色のからぎぬに、若ろがねこがねをのべて、くわんのもん

おかれて、地すりのものもかねをのべて、すはまつるかめおしたるに、ものこしにも、若ろがねを

のべて、うはぎしは、玉をつらぬきてかざられ侍りける、よしだの齋宮鳥羽皇の御は、やのり

給へり、けんぞきこえ侍し、又いだし車十兩なれば、四十人の女房、おもひくによそひせも心

をつくして、けふばかりは制もやぶれてぞ侍ける、あるひはいつにはほひにて、むらさき、くれな

ゐ、もえぎ、やまぶき、すはう、廿五、かさねたるに、うちきぬ、うはぎ、もからきぬ、みなかねをのべても

むにおかれ侍けり、あるはやなぎさくらをせせかさねて、うへはおり物、うらはうち物にして、も

のこしにはにしきに玉をつらぬきて、玉にもぬける春の柳かといふうた、柳さくらをこきませ

てといふうたの心なり、もはゑびぞめをちにて、かいふをむすびて、月のやどりたるやうに、かい

みをしたにすかして、花のかみとなる、水はとせられたり、からぎぬには目をいだして、たゞは

るの日にまかせたらなんと、いふうたの心なり、あるはからぎぬにしきをして、櫻の花をつけ